

## あ と が き

私が初めて台湾を訪れたのは、1986年秋のことだ。もう、25年になる。蔣経国総統は健在だったし、戒厳令も解かれていなかった。まだまだ「抑圧感」のある時代だった。

空港の入国審査では、いたく緊張した。なにしろ、ある知人から、若林正丈さんの『海峡——台湾政治への視座——』（研文出版、1985年）は「危ないから持っていかないほうがいい」などと言われていたからだ。持ち込む本には注意したつもりだが、何か言われたり没収したりされないだろうか。

しかし、その前の手荷物受取所で私は驚くことになる。ベルトコンベアの前でスーツケースが出てくるのを待っていると、隣のお婆さんにいきなり怒鳴られた（と私は感じた）からだ。「その荷物を取ってくれ」と言われただけだったのだが、その口調の激しさにショックを受けたわけだ。税関のほうは、何事もなく通過した。

戒厳令下の台北の街は、実に不思議なところだった。夜になると、憲兵が要所に立つし、巡邏もする。銃剣がキラキラ光って、見るからに怖そうである。しかし、夜店も屋台も遅くまで開いているし、どこもかしこも賑やかである。そのアンバランスに最初は大いに戸惑ったが、いつのまにか慣れていった。それでも、講読していた香港発行の *Asian Wall Street Journal* の記事が一部切り抜かれたり、黒塗りされたりして配達されると、検閲の存在を思い知らされるのだった。

時には、防空演習も実施されていた。街を歩いていると、いきなりサイレンが鳴る。その時は、近くの店に飛び込む。店の人がシャッターを下ろす。警報解除になるまで、外には出られない。皆やれやれという顔をしているが、無視することもできないのだから仕方がない。大陸反攻などという看板が、

まだ見かけられた時代だ。

台湾研究も、自由にできる時代ではなかった。政治意識や省籍矛盾についての本格的な研究は、留学帰りの若手社会学者や政治学者がようやく手をつけ始めた段階だった。劉進慶さんの『戦後台湾経済分析』（東京大学出版会、1975年）や、涂照彦さんの『日本帝国主義化の台湾』（東京大学出版会、1975年）は、中央研究院の図書館くらいでしかお目にかかることはできなかった。それでも、1987年7月に戒厳令が解除になると、少しずつ状況が変わり始めた。アメリカから帰ってきた友人が、「試しに大陸版の中国語訳マルクス・エンゲルス全集を送ったら、無事に届いたよ」と笑っていたように。

そして、1988年1月に蔣経国が死去し、李登輝が総統代行となるや、台湾の友人たちが「怖いほど速い」と言うほどのスピードで何もかもが変わり始めた。まさに歴史が動き出したという感じだった。劉さんや涂さんの本の翻訳が書店に並び始めた。私が台湾を離れた1989年秋には、86年秋の台湾は消えていたと言っていい。民進党も合法化され、いよいよ台湾の民主化が本格的に始まった。

本書の各章が取り扱っているのは、その後の20年間の台湾社会の変化である。私より若い著者たちは、1990年代に台湾で調査を開始し、今日まで台湾社会の激変を観察し続けている。その成果を持ち寄り、2年間にわたって現代台湾社会の「真面貌」を探り続けた成果が、本書なのである。私たちは、ますます複雑化する台湾社会の、ほんの一面をなぞることができたに過ぎないが、ステレオタイプ的ではない台湾社会像を描くことができたのではないかと、少しばかり自負している。読者諸賢の厳しい御斧正をいただき、さらなる台湾社会研究の発展に寄与することができることを切望してやまない。

2011年秋

沼崎一郎